福島県文化財センター白河館収蔵の
北白川下層Ⅱｃ式土器の紹介

山本　友紀

１　はじめに

「在地系土器」とは、一般的にその地域で主体的に出土する土器のことを指す。例えば、福島県の縄文時代前期～中期における在地系土器と言えば、宮城県七ヶ浜町大木囲貝塚を指標遺跡とする大木式土器(註１)が真っ先に思い浮かび、この土器が分布する様式圏が、おのずと「文化圏」として認知されている（図１）。遺跡からは在地系土器ばかりではなく、それ以外の土器も出土する。しばしば「非在地系土器」と呼称されるもので(註２)、他地域から持ち込まれたり（搬入土器）、他地域のものをまねてつくったりしたもの（模倣土器）を言う。また、在地系土器と非在地系土器の要素が混在したいわゆる「折衷土器」の類もある。いずれにせよ、非在地系土器や折衷土器は、地域間交流をうかがい知ることができる遺物の一つとして、重要な意味を持つ。

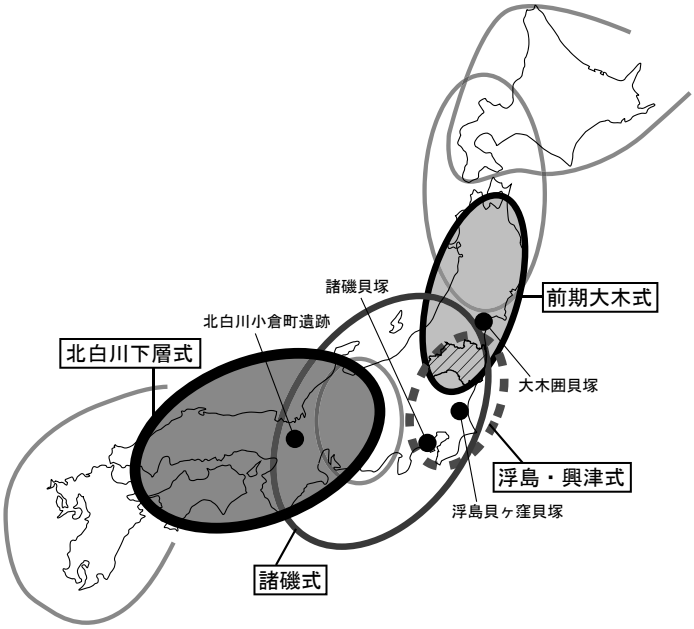


図１　東北～関東地方における縄文時代前期の主な土器様式圏

しかしながら、これらは必ずしも良好な出土状況を示すとは限らない。特に非在地系土器は、より遠隔地のものになればなるほど少量の破片が散発的に出土する程度で、報告書では触れられていても、その後はなかなか取り上げられないことが多い。しかし、これらが出土するということは何らかの人やモノの「動き」があったことは事実であり、注目に値するものである。そこで、今回は非在地系土器に着目し、郡山市田向Ａ遺跡(註３)出土の北白川下層Ⅱｃ式土器を紹介するとともに、本県における非在地系土器についての展望を導きたい。

２　北白川下層Ⅱｃ式土器について

福島県において北白川下層式土器は、見慣れない型式である。それもそのはず、縄文時代における西日本との関連性が今の所あまり見出せていない本県にあって、同式土器は関西地方を中心に分布する土器だからである。そこで、まずは同式土器を理解するために、研究略史と主な特徴を整理し、加えて同Ⅱｃ式土器並行期における本県の土器様相について若干触れてみたい。

（１）研究略史

北白川下層式土器の分布は、関西地方を中心に西日本にある（図１）。この土器が最初に発見されたのは大阪府藤井寺市国府遺跡出土(註４)の調査であるが、明確な型式設定に至ったのは、京都府左京区北白川小倉町遺跡の調査を見てからである(註５)。まず最初に、山内清男が『縄文土器型式の細別と大別』(註６)中で「国府北白川１式」と称し、前期後葉に位置づけた。これを契機に、北白川小倉町遺跡を標識遺跡に据え多くの研究者によって細分案が提示され、名称も「北白川下層式」と改められた。画期となったのは、良好な層位資料が出土した福井県若狭町鳥浜貝塚の調査である(註７)。これらを基に、まず森川昌和が鳥浜Ⅰ～Ⅳ式として４細分し(註８)、その後それらを北白川下層式土器と改めた上で岡田茂弘や網谷克彦が追証や再整理を行い(註９)、現在の前期後半に位置づける編年に至っている。しかしながら、関西地方は縄文時代の遺跡自体が希薄で、かつ良好な層位資料に乏しい現状にあり、今後も編年や分類について検討の余地を残している型式でもある。

北白川下層式土器と両極をなすものとしてしばしば取り上げられるのが、関東地方南部に分布の中心を持つ諸磯式土器である。特に、諸磯ｂ式土器の浮線文と北白川下層式土器の凸帯文や、特殊形態をなす浅鉢など、その関連性や相互の影響について、研究者の論点の的になっている(註10)。

（２）特徴

北白川下層式土器は、施文や器形から６細分（Ⅰａ、Ⅰｂ、Ⅱａ、Ⅱｂ、Ⅱｃ、Ⅲ）されている(註11)。特徴を簡潔に述べると、同Ⅰ式土器の施文が二枚貝を用いた条痕調整と爪形文などで、器形は平底か丸底、同Ⅱ式土器以降の施文は羽状縄文や斜縄文と爪形文などで、器形は平底、同Ⅲ式土器がこれに特殊凸帯文を有する(註12)。いずれにも共通するのは、薄手の土器であることと胎土に繊維を含まないことである。さらに、本稿紹介の同Ⅱｃ式土器に限って言及すれば、前段階（同Ⅱｂ式土器）までロ縁部文様帯の施文が爪形やＣ字状・Ｄ字状などの刺突文だったものが、同Ⅱｃ式土器になると凸帯文に取って替わることが、最たる特徴である。凸帯上は基本的に施文され、断面が丸い凸帯にＣ字状やＩ字状の刻みを施すものと、扁平な凸帯に縄文を施すものとがある(註13)。

（３）福島県における北白川層Ⅱｃ式並行期の土器様相

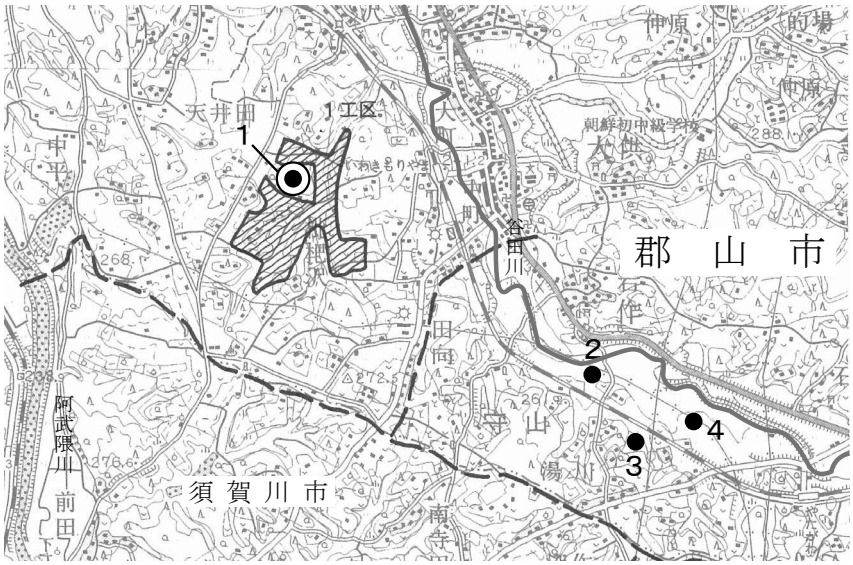
本県における前期の土器編年（在地系土器）は、初頭の船入島下層・上川名上層式土器に始まり、冒頭でも述べた前期大木式土器に続く。前期の遺跡は、前・後半期に多く中間の時期は少ない傾向にあり、特に大木３式土器期の集落はほとんど確認されていない。

北白川下層式土器に並行する在地系土器は、前期後半の大木２～５式土器と考えられるが、今のところ明確な共伴関係は確認されていない。このため積極的に言及はできないが、案件の北白川下層Ⅱｃ式土器並行期の土器は、後述する田向Ａ遺跡の事例などから、本稿では大木３～４式土器の射程であるとしておきたい。これらと共伴関係にある非在地系土器は、関東系の

諸磯式土器や浮島式･興津式土器が顕著であり、特に東関東地域との関連性が強い傾向にある。後述するが、当該期は東関東地域と南東北地域間で、相互に土器の移動が認められるようになる時期であるという(註14)。時期はやや下るが、会津美里町冑宮西遺跡(註15)では、大木５式・興津式・諸磯ｃ式土器の共伴関係が明確になり、前期後半期の土器群を考える上で重要な事例であると言える。

3　田向Ａ遺跡出土の北白川下層Ⅱｃ式土器について

さて、福島県文化財センター白河館収蔵の北白川下層式土器は、郡山市田向Ａ遺跡出土の同Ⅱｃ式土器のみである。これは県内唯一のもので、同式土器の分布の北限である可能性が指摘されている(註16)。同資料は遺物包含層から破片 10 点ほどの出土であり、遺存状態も良好とはいえないが、繊細な施文であることや非常に薄手の土器であることなど、明らかに非在地系土器と気づく。これとは別に、ほぼ同地点から浮島Ⅰ式土器片が数点出土している。



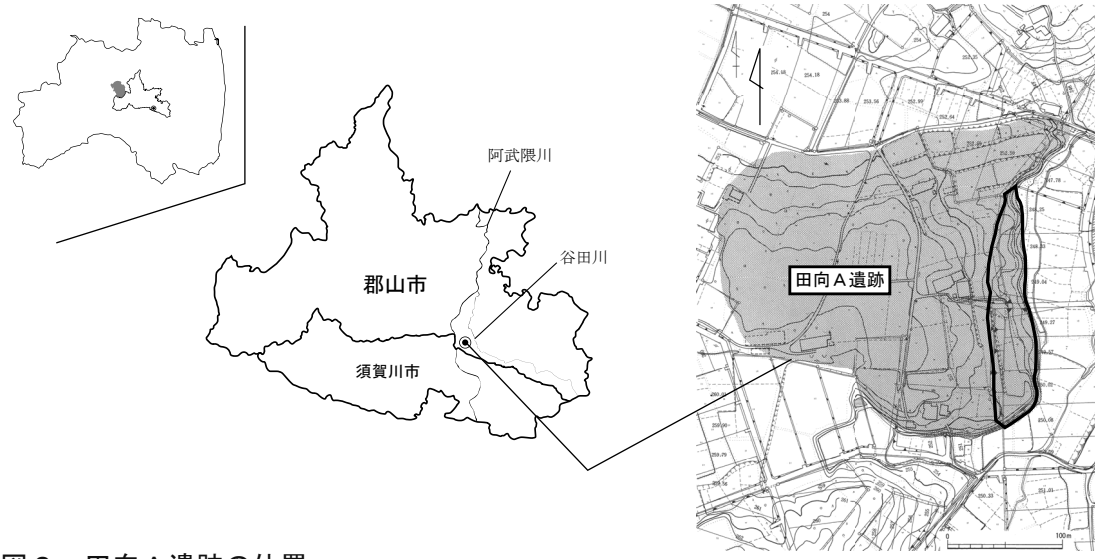


図２　田向Ａ遺跡の位置

なお、本稿を執筆するに当たり、報告書に掲載されている実測図の順序を入れ替え任意に番号を振り直したこと、土器断面の傾きや端部の様子などを若干修正したこと、写真を再撮影したこと（本稿の実測図と写真の番号は一致）を、あらかじめご容赦願いたい。

（１）遺跡概要

田向Ａ遺跡は、福島県のほぼ中央、郡山市田村町守山字田向に所在する。阿武隈川と谷田川に挟まれた、郡山盆地南東端に接する阿武隈高地の西端部低丘陵地帯東辺部に立地する。平成元年に、国営総合農地開発事業母畑地区に伴い発掘調査された。

遺跡がある範囲は、地形的には４つの微丘陵からなり（図３）(註17)、遺構はそれぞれの微丘陵上で検出された。これらは９世紀前半を主体とする集落で、中には鍛冶遺構を伴う建物も検出されており、貴重な調査成果が得られている。遺構はないものの、微丘陵間に形成された５つの遺物包含層からは、少量の縄文土器と、古墳時代～平安時代の土師器・須恵器等が出土している。

なお、田向Ａ遺跡周辺の縄文時代前期の遺跡（図２）には、唐松Ａ遺跡や地蔵田Ａ遺跡、前期前半の住居跡が確認された地蔵田Ｂ遺跡等(註18)があるが、前期後半の明確な遺跡は確認されていない。

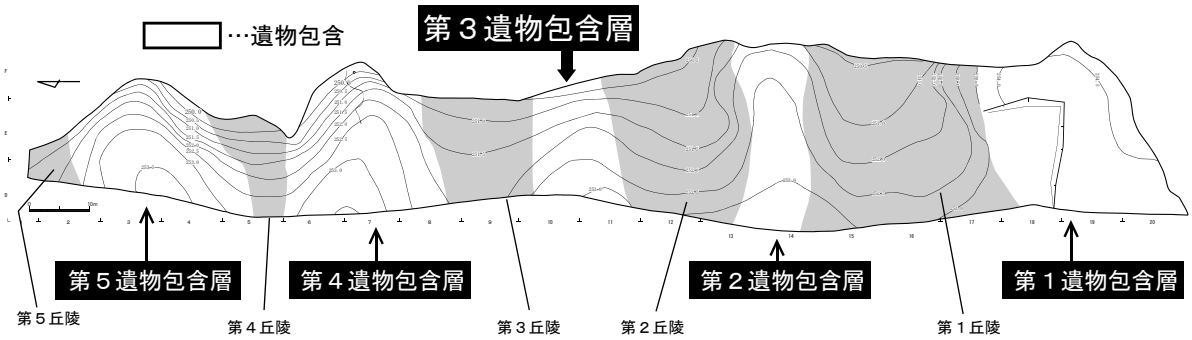


図３　田向Ａ遺跡の地形図

（２）出土した北白川下層Ⅱｃ式土器について（図４・写真１）

北白川下層式土器は、第３・４丘陵間に形成された第３遺物包含層から出土した。土器片は全部で10点、堆積土の最下層からある程度まとまって出土している。

これらは地文に０段多条非結束の羽状縄文を施し、凸帯で文様を描くものである。凸帯の断面形は、隅丸台形状を呈する。遺存状態がやや不良で摩耗しているものもあるが、凸帯上には密な斜位の刻みが認められる（写真２）。器厚は非常に薄く３～４㎜程度であり、胎土には１㎜程度の白色粒がやや目立つ。色調は、外面が褐灰色～にぶい橙色、内面がにぶい橙色～黒色を呈する。

個別に見ると、１～４は口縁部かその付近、５～10は胴部片である。１は、口縁端面にまでおよぶ曲線を描く対の凸帯を貼付している。さらには、口縁端面を調整する際にはみ出した粘土をそのまま内外面に張り出させ、装飾的に処理している。５・６からは、横位の凸帯文を

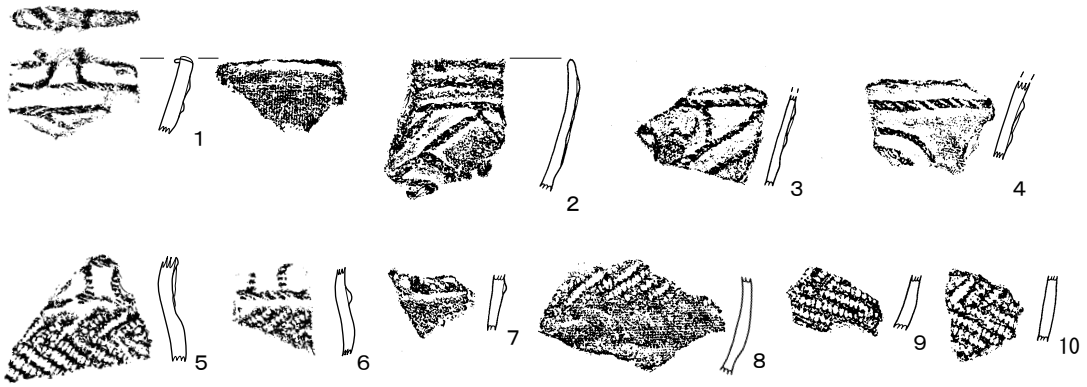


図４　出土した北白川下層Ⅱｃ式土器実測図（縮尺＝1/3）

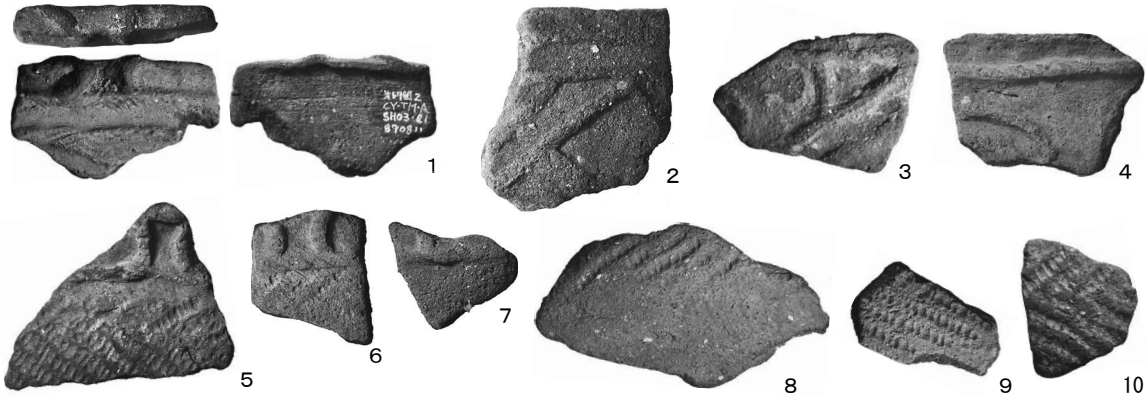


写真１　出土した北白川下層Ⅱｃ式土器写真（縮尺＝1/2）

写真２　凸帯上に施された刻みの様子

境に頸部で括れ、胴部の地文部がやや丸みを帯びる器形が見て取れる。８の天地は不明だが、地文部を天と仮定すると、湾曲した器形や下半が無文になることなどから、底部付近の破片である可能性がある。これら１～10について、報告書に記載はないが、胎土や焼成の状態、施文などから判断して、同一個体の可能性がある。

本土器のほか、ほぼ同地点から、不整撚糸文や貝殻腹縁文が施された浮島Ⅰ式土器が数点出土している（写真３）。

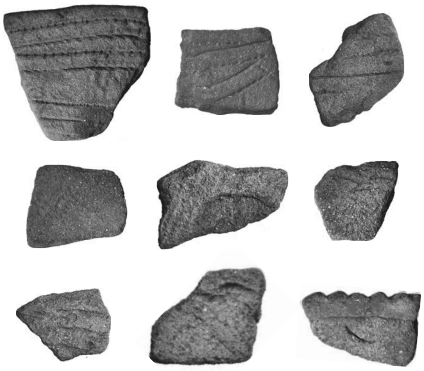


写真３　出土した浮島Ⅰ式土器（縮尺＝1/3）

（３）検討

ここまで、資料をできる限り詳細に観察し、記載した。当該期の凸帯文（浮線文）系の土器と言えば、本県では真っ先に諸磯ｂ式土器を想起するが、本土器は器壁が３～４㎜程度と非常に薄手であること、地文に羽状縄文を持つこと、口縁端面にまで及ぶ凸帯文を持つこと、凸帯上の刻みが細く密であることなどから、それとは明らかに異なることが分かる。これらはまさに、北白川下層Ⅱｃ式土器の特徴をよく捉えていると言える。さらには、福井県若狭町鳥浜貝塚出土の北白川下層Ⅱｃ式土器によく似ていることに気付く。特に、口縁端面にまで及ぶ曲線を描いた対の凸帯文が酷似している。遺存状態があまり良くない小破片であるため断定し得ないが、本場関西地方で出土するような（特に鳥浜貝塚出土のもの）同Ⅱｃ式土器に酷似しているとの指摘もあり(註19)、搬入土器の可能性は大いにある。

器形復元の試み

ここで、小破片ながらも想像をたくましくすれば、５・６の胴部片から器形が復元できそうである。両破片の地文部における小さな丸い膨らみに着目すると、鉢もしくは浅鉢など、深鉢以外の器種が想定される。同Ⅱ式土器の深鉢の器形は、基本的に「有文深鉢には口縁部が大きく外湾する形式と開きぎみに直行する形式」で、さらに、胴部は「頸部から胴部へは膨らみがなくなり、緩やかにすぼんで底部に至る」(註20)とされる。特に同Ⅱｃ式土器にあっては「口縁部にかけてわずかに外反する程度で屈曲を持たないものもみられる」(註21)とされる。ここで改めて田向Ａ遺跡の資料を見ると、口縁部は直行ぎみに開き（１～４）、横位の凸帯文を境に頸部で緩くくびれ胴部が小さく丸く膨らんでいる（５・６）。この丸み（湾曲）は、８にも表れている。つまり、上記した深鉢の器形には当てはまらないと言える。

そこで、出土した10点すべてが同一個体であると仮定して、図５に予想し得る器形の復元模式図を作成した。鉢形を想定したものであるが、この器形は、鳥浜貝塚（1987年）第11群土器Ａ類第19図３の「鉢形土器」(註22)を参考にした。頸部でくびれ、直下が丸く膨らむ様相が類似している。波状口縁を想定したのは、２～４の曲線を描くモチーフが波状口縁に呼応していると考えたからだが、何分小破片であるため推測の域を出ない。このような器形は、標識遺跡である北白川小倉町遺跡図版第47の「鉢形土器」にも求めることができる(註23)。やや異なるのは、底部付近が丸みを帯びる器形と推測されることである。これは、諸磯式土器の浅鉢に近いイメージである。

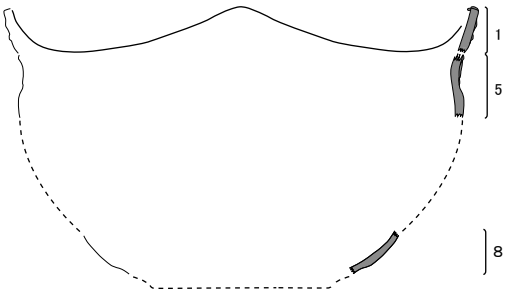


図５　器形復元予想図

鉢や浅鉢に関しては、日常的に使用するような雑器とは性格が異なる可能性が指摘されている。特に、前期の浅鉢は、特殊性が顕著に表れているものがある。次に、その特殊性について簡略にまとめる。

前期の浅鉢について

浅鉢は、縄文時代前期になって出現すること(註24)や、前期後半に「諸磯式土器が発展する

頃、浅鉢は一大盛期を迎える」(註25)ことなどが知られている。また、該期の土器に赤色顔料や漆が塗布される例も多くあること(註26)、さらに、諸磯ｂ式土器に関しては、有孔浅鉢（と獣面把手を付した土器）が「しばしば持ち運ばれる土器として特別な意味を持つ。その分布は遠く関西から東北まで及んでいる」(註27)とあることや、しばしば土坑（墓坑）中から出土する事例があることなどから、特殊な性格を有する器種であることが想像できる。その中で、鉢もしくは浅鉢と予想される田向Ａ遺跡出土の北白川下層Ⅱｃ式も、遠く離れた地へもたらされたのかもしれない。

（４）小結

以上をまとめると、田向Ａ遺跡出土資料は、北白川下層Ⅱｃ式土器そのものであり、特に鳥浜貝塚出土のものに類似する。器形は推測の域を出ないが、頸部で緩くくびれ胴部で小さく丸く膨らむ破片であることを鑑みると、深鉢形以外の鉢形もしくは浅鉢形の可能性が指摘できる。なお、出土状況を考慮すると積極的には言えないが、浮島Ⅰ式土器とほぼ同層位から出土していることから、これと並行関係にある可能性がある。

４　近県における北白川下層Ⅱｃ式土器の様相

ここで、近県の様相にも若干ながら触れておく。近年の開発事業等により、発掘調査及びその出土資料の数は格段に増加してはいるが、管見の限りでは約四半世紀前の報告から変わらず、北白川下層式土器の分布の北限は田向Ａ遺跡であると認識する。これより南、関東地方ではある程度出土しているが、その量は決して多くはない。関東地方における前期の土器型式は、概ね関山式土器から興津式土器にかけてであり、この中で案件の北白川下層Ⅱｃ式並行期に比定されるのは、諸磯ｂ式土器（古段階）や浮島Ⅰ・Ⅱ式土器である。前述したが、諸磯ｂ式土器は浮線文を施文することで北白川下層Ⅱ式土器と対比して考えられることが多く、その出自や関連性に注目されているものである。諸磯式・浮島式土器は、東関東地域を主体に分布する土器群であるが、この頃、当該地域（特に千葉県及び茨城県）では、東北系の大木３～４式土器が少数ではあるが出土するという(註28)。後続する諸磯ｃ式・興津Ⅱ式土器期ではこの事象が際立つようになり、大木５式土器の出土が飛躍的に増加する。ひるがえって南東北地域では、大木５式土器とともに（セットをなすように）諸磯ｃ式・興津Ⅱ式土器が出土することが知られており、当該期は南東北地域と東関東地域間で相互の深い係わりがあったことがうかがえる。

最近では埼玉県及び千葉県で、北白川下層式土器の集成が行われている(註29)。これらによると、両県とも良好な共伴関係はなく、散発的で、ほとんどが１～数点の出土に留まるようである。埼玉県では18遺跡が集成され、このうち半数以上の遺跡で同Ⅱｃ式土器が出土したことを報告している。このことは「中部・東海に似た土器が見られるようになる延長線で捉えられる」としており、この時期、西方からの「動き」が盛んであったことを分析している。千葉県では前期の非在地系土器（木島式土器・北白川下層式土器・前期大木式土器）に着目し、そ

れぞれ集成を行っている。北白川下層式に関しては14遺跡が集成され、同Ⅱｃ式土器を出土した遺跡が最も多いことを報告している。これは、埼玉県と同様の結果である。つまり、北白川下層式土器が東日本で出土するようになる画期は、同Ⅱｃ式土器期にある可能性が推測でき、この状況下で田向Ａ遺跡に行きついたのだろう。前述したが、当該期は東北南部と東関東との相互関係が指摘できる時期であり、同Ⅱｃ式土器期はまさしくその前夜に位置づけられると言えそうだ。

５　ま と め

田向Ａ遺跡出土の北白川下層Ⅱｃ式土器について、できるだけ詳細に観察し、現時点で考え得る限りのことを記述した。今一度まとめると、当該資料は北白川下層Ⅱｃ式土器の特徴をよく捉えており、特に鳥浜貝塚の出土資料に多くの類似性を求めることができる。器形は深鉢以外のもので、鳥浜貝塚や北白川小倉町遺跡等に類例が求められるような、鉢や浅鉢の可能性が考えられる。浅鉢に関しては、北白川下層Ⅱｃ式土器並行期の諸磯ｂ式土器の有孔浅鉢などが広範囲に分布する事例があることなどから、鉢もしくは浅鉢は“持ち運ばれる土器”としての性格が推測される。さらに、東関東地域では、北白川下層Ⅱｃ式土器が比較的多く出土することなどから、当該期に北白川下層式土器の東進の画期を想定でき、この流れの中、同式土器が本県にももたらされたものと考察する。また当該期は、南東北地域と東関東地域との相互関係が認められ始める時期でもあり、このことと同Ⅱｃ式が本県で出土したことは、興味深い事実として受け止めなければならないだろう。

今回紹介した田向Ａ遺跡出土資料は、あくまでも遺物包含層出土の遺物であり、原位置を留めていない可能性や小破片であることなどを忘れてはならず、本稿の検討においては飛躍的な部分も多々ある。また、東進の画期については、本県と埼玉・千葉県の間にある栃木・茨城・群馬の様相を把握しないままの考察であり、あくまでも推測の域を出ないことは否めない。しかしながら、関西系の土器が当地域で出土したことは事実であり、縄文時代前期の地域間交流を考える上で、有意な事例であることは間違いない。

なお、遠隔地の非在地系土器に関しては、早期に位置づけられる東海系の入海式土器が、石川町五反分Ｄ遺跡で出土している(註30)。２点の土器片であるが、該期において「県内でも東海系の土器との関連を避けて通れない状況となった」と注目されているように、出土した事実は大いに評価すべきである(註31)。

最後に今後の展望として、今回は資料の検討のみにとどまってしまったが、非在地系土器が、遠隔地で出土するに至る背景、特に自然災害等の環境変化はどのようなものであったのか、他の遺物（土製品や石製品・石材等）の流通との関連性はあるのか、周辺地域の様相はいかなるものかなど、総合的に検討できればと考えている。

＜註＞

（註１）大木式土器について、白鳥 1989 及び丹羽 1989 では大木１～６式土器を「前期大木式土器」、大木７～ 10 式土器を「中期大木式土器」と呼称しており、本稿もこれに従う。
　白鳥良一　1989　「前期大木式土器様式」『縄文土器大観１　草創期　早期　前期』小学館
　丹羽　茂　1989　「中期大木式土器様式」『縄文土器大観１　草創期　早期　前期』小学館

（註２）本稿では、この類を総じて「非在地系土器」と記述するが、必要に応じて「搬入土器」や「模倣土器」と明記することとする。

（註３）吉野滋夫　1990　「第１篇田向Ａ遺跡　第２章遺構と遺物　第８節遺物包含層　３第３遺物包含層」『国営総合農地開発事業　母畑地区遺跡発掘調査報告 29』福島県教育委員会

（註４）濱田耕作　1918　「河内國府石器時代遺跡発掘調査報告」『京都帝国大学文科大学考古学研究報告』第二冊

（註５）梅原末治・小林行雄　1935　「京都北白川小倉町石器時代遺跡発掘調査報告」『京都府史跡名勝天然紀念物調査報告書 16 冊』京都府

（註６）山内清男　1937　「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』１巻１号

（註７）福井県教育委員会　1979　『鳥浜貝塚―縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査―』鳥浜貝塚研究グループ

（註８）森川昌和　1963　「福井県鳥浜貝塚を巡る２、３の問題」『物質文化』創刊号

（註９）岡田茂弘　1965　「Ⅱ縄文文化の発展と地域性７　近畿」『日本の考古学Ⅱ近畿』河出書房
　網谷克彦　1982　「北白川下層式土器」『縄文文化の研究３』雄山閣

（註 10）縄文セミナーの会 1999 において、磯式土器を中軸に据え、これに関連させた北白川下層式土器の論考が多く掲載されている。
　縄文セミナーの会　1999　『第 12 回　縄文セミナー　前期後半の再検討―記録集―』

（註 11）網谷克彦　1989　「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観１　草創期　早期　前期』小学館

（註 12）鈴木康二　2008　「北白川下層式土器」『総覧　縄文土器』『総覧縄文土器』刊行会
　近年、北白川下層Ⅲ式に関しては、後続する大歳山式土器とともに「特殊凸帯文系土器」としてとらえられている（鈴木康二　2008　「特殊凸帯文系土器（北白川Ⅲ式・大歳山式）」『総覧　縄文土器』『総覧縄文土器』刊行委員会）。

（註 13）この違いは時期差なのか地域差なのか、どのような過程がたどれるかなどの検討が、今後の課題となっている（前掲註９の網谷 1982 と同じ）。

（註 14）芳賀英一　1985　「大木５式土器と東部関東との関係」『古代』80 号　早稲田大学考古学会

（註 15）芳賀英一　1984　「胄宮西遺跡―縄文時代早期・前期集落跡の調査―」『福島県会津高田町文化財調査報告書　第５集』福島県会津高田町教育委員会

（註 16）前掲註３と同じ。

（註 17）４つの微丘陵は、註３の「第１編第１章第３節１調査方法」で、「南から第１丘陵・第２丘陵・第３丘陵・第４丘陵・第５丘陵と命名した」とあり、本稿もこの名称に従う。

（註 18）福島県教育委員会　1983　「唐松Ａ遺跡（含・唐松館跡）・地蔵田Ａ遺跡・地蔵田Ｂ遺跡（含・カナイ館跡）」『国営総合農地開発事業　母畑地区遺跡発掘調査報告 11』

（註 19）福島県文化財センター白河館学芸課学芸課長芳賀英一氏の教示による。なお、諸磯式土器圏で出土する薄手の非在地系土器に関しては、安易に北白川下層式と考えるのではなく、関東と関西の間にある地域、東海・信州・北陸の影響を第一議しなければならないという警鐘もあり（増子康眞　1999　「東海地方の諸磯ｂ式並行段階の様相」『第 12 回縄文セミナー　前期後半の再検討―記録集―』縄文セミナーの会）、今後の動向が注目される。

（註 20）前掲註９の網谷 1982 と同じ。

（註 21）前掲註 10 と同じ。

（註 22）網谷克彦　1979　「第４章遺物Ⅰ　第１節土器　２．土器Ⅰ」『鳥浜貝塚―縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査１―』鳥浜貝塚研究グループ
　同土器は、網谷 1989（前掲註 11 と同じ）では、北白川下層Ⅱａ式土器に比定されているものである。

（註 23）同土器は、網谷 1989（前掲註 11 と同じ）では、北白川下層Ⅱｃ式土器に比定されている。前述した鳥浜貝塚出土の鉢形土器は同Ⅱａ式であるが、同じような器形が同Ⅱｃ式土器まで継続するようである。

（註 24）村田文夫　1996　「縄文時代前期浅鉢形土器出現期の様相」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会

（註 25）松田光太郎　1998　「東関東における縄文前期後半の浅鉢形土器に関する考察―浮島・興津式土器に属する浅鉢形土器を対象として」『神奈川考古』34 号　神奈川考古同人会

（註 26）大木４式土器においては、「有孔浅鉢や漆塗りの彩文土器（41）も伴う場合がある」とされる（早瀬亮介　2008　「前期大木式土器」『総覧　縄文土器』『総覧　縄文土器刊行会）。この土器の著名なものに、山形県高畠町押出遺跡出土の浅鉢がある（山形県教育委員会　1990　『山形県埋蔵文化財調査報告書 150 集　押出遺跡発掘調査報告書』）。

（註 27）関根慎二　2008　「諸磯式土器」『総覧　縄文土器』『総覧　縄文土器』刊行委員会

（註 28）前掲註 14 と同じ。

（註 29）近江　哲　2012　「縄紋時代前期の搬入土器―埼玉県内における北白川下層式―」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第６号　埼玉県立さきたま史跡の博物館
横山　仁　2009　「房総における縄文時代の非在地系土器について　第２章　前期の非在地系土器」『研究紀要』26　（財）千葉県教育振興財団文化財センター

（註 30）高橋信一　1986　「10 五反分Ｄ遺跡」『国営総合農地開発事業　母畑地区遺跡分布調査報告Ｘ』福島県教育委員会

（註 31）中村五郎　1986　「東北地方の古式縄紋土器の編年―福島県内の資料を中心に―」『地質・考古編　福島の研究１』清文堂出版株式会社

【挿図出典】
・図１…小林達雄　1989　「縄文土器の様式と型式・形式」『縄文土器大観４　後期・晩期・続縄文』小学館中の、「＜前期＞縄文土器様式圏」を参考に作成。
・図２…註４・５・７～９文献より作成。
・図３…註２文献より転載・加筆して作成。
・図４…註２文献より転載・加筆して作成。
・図５…註７文献をもとに、筆者が作成。

【写真出典】
・写真１…註２文献を参考に、筆者が撮影。
・写真２…筆者が撮影。
・写真３…註２文献を参考に、筆者が撮影。